

「旧制中等教育での教科書教材としての芥川作品」

武田憲幸（静岡県立新居高校教員）

はじめに

2000年度 高校国語95種の教科書（国語 国語 現代文）

「羅生門」24 「蜜柑」「鼻」各3

「ピアノ」「或阿呆の一生」「幻灯」「枯野抄」「舞踏会」「奉教人の死」

各1 計36作品

1925年

「客『芥川先生の作品にして中学校女学校の読本に採録され候ものは如何に御座候や。』主『最近に調査致候ところによれば「蜘蛛の糸」「芋粥」「尾形了齋覚書」「鼻」「或日の大石内蔵之助」「英雄の器」「槍ヶ嶽紀行」「漱石山房の秋」「蜜柑」「戯作三昧」「俊寛」「トロツコ」「お母さん」等に御座候。中には節略も有之候。』」（「書齋に於ける芥川龍之介氏」 神代種亮 「文章倶楽部」第11巻第8号 1925年8月

「芥川龍之介研究資料集成」 巻2 p271 関口安義編 日本図書センター 1983年発行）

1925年当時の教科書編集者の評価

「芥川龍之介氏はアイウエオ順で筆頭に立てられる作家であるが、アイウエオ順でなくても正に筆頭に置かれるべき作家である。氏の文章は文法的に見ても大抵正確である。今、土龍子の眼に触れた限の題目を挙げると、『蜘蛛の糸』『動物園』『少年』『杜子春』『鼻』『煙管』『蜜柑』『漱石山房の秋』『或日の大石内蔵之助』などである。これだけあれば、教科書に見える現代作家としても、文章の篇数の上から言って第一流である。その文のーに就いてテーマとか表現とか観察とか描写といった問題を云々することは土龍子の得意とする所でない。又氏の作物文章に対する世間の定評がその必要を認めさせもしない。」

（「国語教科書編集者の見たる現代作家の文章」 土龍子 「文章倶楽部」 第11巻 第11号 1925年11月 「芥川龍之介研究資料集成」 巻2 p296～297 関口安義編 日本図書センター 1983年発行）

戦前の中等教育の国語教材 芥川作品の位置

a 昭和戦前期の国語教科書 旧制中学53種 高等女学校42種

（国語教育史資料 第二巻 教科書史 東京法令出版 1981年4月 井上敏夫）

b 「旧制中等教育 国語科教科書内容索引」（1984年2月発行 田坂文穂 教科書研究センター）

旧制中学37種、高等女学校35種の教科書対象

表1

| 作者名  | 旧制中学採録数 | 高等女学校採録数 | 合計数 | 作者名  | 旧制中学採録数 | 高等女学校採録数 | 合計数 |
|------|---------|----------|-----|------|---------|----------|-----|
| 島崎藤村 | 176     | 182      | 358 | 大町桂月 | 104     | 81       | 185 |

|      |     |     |     |       |    |     |     |
|------|-----|-----|-----|-------|----|-----|-----|
| 五十嵐力 | 128 | 151 | 279 | 幸田露伴  | 90 | 90  | 180 |
| 夏目漱石 | 154 | 121 | 275 | 荻原井泉水 | 75 | 102 | 177 |
| 北原白秋 | 113 | 133 | 246 | 正岡子規  | 96 | 80  | 176 |
| 芳賀矢一 | 127 | 101 | 228 | 吉田兼好  | 94 | 77  | 171 |
| 平家物語 | 115 | 102 | 217 | 松尾芭蕉  | 84 | 76  | 160 |
| 太平記  | 116 | 95  | 211 | 徳富蘇峰  | 91 | 61  | 152 |
| 薄田泣菫 | 105 | 91  | 196 | 藤岡作太郎 | 88 | 63  | 151 |
| 高山樗牛 | 113 | 83  | 196 | 森鷗外   | 81 | 69  | 150 |
| 相馬御風 | 105 | 87  | 192 | 芥川龍之介 | 72 | 76  | 148 |
| 徳富蘆花 | 98  | 88  | 186 |       |    |     |     |

c 「筆頭に置かれるべき作家である。氏の文章は文法的に見ても大抵正確である。＜中略＞教科書に見える現代作家としても、文章の篇数の上から言つて第一流である。＜中略＞氏の冷静な理智の閃きと、その俳諧漢詩乃至洋文脈から来た手法と、殊に歴史小説に於て口外あたりを学んでゐると思はれる、かの叙事の間に手際よく挿入しおほせた叙景の情趣などは、いかほどまでに生徒の前にパラフレーズされてをり、鑑賞されてゐるであらうかと氣遣はれる。それほど氏の文章には真の宝玉が深く蔵されてゐる。」(芥川龍之介研究資料集成 巻2 p297 「国語教科書編集者の見たる現代作家の文章」 土龍子 初出「文章倶楽部」第11巻第11号 1925年11月)(同上 p297)

表2

| 発行年  | 芥川採録数<br>( )は高女<br>採録数 | 田坂氏調査の<br>教科書数<br>( )は高女<br>教科書数 | 同時期教科書数<br>( )は高女<br>教科書数 | 漱石採録数<br>( )は高女<br>採録数 | 備考              |
|------|------------------------|----------------------------------|---------------------------|------------------------|-----------------|
| 昭和2  | 18(13)                 | 7(4)                             | 9(3)                      | 30(21)                 |                 |
| 昭和3  | 16(6)                  | 8(6)                             | 9(2)                      | 36(24)                 |                 |
| 昭和4  | 10(7)                  | 2(1)                             | 4(1)                      | 13(5)                  |                 |
| 昭和5  | 3(0)                   | 1(0)                             | 3(1)                      | 6(0)                   |                 |
| 昭和6  |                        |                                  | 4(0)                      |                        |                 |
| 昭和7  | 16(10)                 | 8(3)                             | 12(6)                     | 32(7)                  |                 |
| 昭和8  | 21(13)                 | 8(6)                             | 10(7)                     | 23(15)                 |                 |
| 昭和9  | 13(3)                  | 7(2)                             | 6(3)                      | 24(6)                  |                 |
| 昭和10 | 9(7)                   | 6(4)                             | 4(2)                      | 23(12)                 |                 |
| 昭和11 | 12(10)                 | 4(3)                             | 1(0)                      | 15(12)                 |                 |
| 昭和12 | 17(9)                  | 12(7)                            | 16(10)                    | 47(22)                 | 中学・高女教授<br>要目改正 |
| 昭和13 | 4(2)                   | 2(1)                             | 5(3)                      | 9(5)                   |                 |

|      |      |      |      |      |                    |
|------|------|------|------|------|--------------------|
| 昭和14 | 3(0) | 2(1) | 2(1) | 6(2) |                    |
| 昭和15 | 3(0) | 3(1) | 3(1) | 9(2) | 検定出願停止<br>5種類ずつとなる |
| 昭和16 | 3(0) | 1(0) |      | 2(0) |                    |
| 昭和18 |      |      | 1    |      | 中等学校令<br>国定教科書     |

表3

| 作品名           | 種類  | 旧制中学<br>教科書<br>採録数 | 高等女学<br>校教科書<br>採録数 | 作品名    | 種類 | 旧制中学<br>教科書<br>採録数 | 高等女学校教<br>科書採録数 |
|---------------|-----|--------------------|---------------------|--------|----|--------------------|-----------------|
| 蜘蛛の糸          | 童話  | 14                 | 13                  | 沼地     | 小説 | 1                  | 2               |
| 戯作三昧          | 小説  | 20                 | 6                   | 大川の水   | 随筆 | 2                  | 1               |
| 蜜柑            | 小説  | 4                  | 16                  | 漱石山房の秋 | 随筆 | 0                  | 3               |
| 手巾            | 小説  | 0                  | 9                   | 蛙      | 小説 | 2                  | 1               |
| 槍ヶ岳紀行         | 紀行文 | 5                  | 3                   | 少年     | 小説 | 1                  | 2               |
| 或日の大石<br>内蔵之助 | 小説  | 4                  | 3                   | 尾形了齋覚書 | 小説 | 2                  | 0               |
| トロッコ          | 小説  | 5                  | 2                   | 枯野抄    | 小説 | 0                  | 2               |
| 杜子春           | 童話  | 3                  | 2                   | 雛      | 小説 | 0                  | 2               |
| 蘇州城内          | 紀行文 | 2                  | 1                   | 水兵と兎   |    | 0                  | 2               |

単数採録教材

| 校種       | 教材名     | 種類   | 校種    | 教材名    | 種類 |
|----------|---------|------|-------|--------|----|
| 旧制中学     | 黒衣聖母    | 小説   | 高等女学校 | ピアノ    | 小品 |
|          | 少年      | 小説   |       | 隅田川を観る | 随筆 |
|          | 夏目先生に贈る | 書簡   |       | 雌蜘蛛    | 小品 |
|          | 鼠       |      |       | 竹      | 随筆 |
|          | 鼻       | 小説   |       | 動物園    | 随筆 |
| 避暑地からの手紙 | 書簡      | 小品三題 | 新緑等   | 随筆     |    |
|          | 日比谷の秋   | 随筆   |       |        |    |

男女別学制度下での国語教材 半数強が男女別の教材だった

表4-1

|                                     | 教材数5以上          | 教材数5未満          |
|-------------------------------------|-----------------|-----------------|
| 高等女学校率<br>70%以上                     | Aグループ<br>1080教材 | aグループ<br>3502教材 |
| 高等女学校率<br>70%未満かつ<br>旧制中学率<br>70%未満 | Bグループ<br>5539教材 | bグループ<br>1838作品 |
| 旧制中学率<br>70%以上                      | Cグループ<br>1335教材 | cグループ<br>3265教材 |

表4 - 2 旧制中学・高等女学校両方の教科書編集をした17グループの教材数

|                                     | 教材数5以上          | 教材数5未満          |
|-------------------------------------|-----------------|-----------------|
| 高等女学校率<br>70%以上                     | Aグループ<br>694教材  | aグループ<br>2228教材 |
| 高等女学校率<br>70%未満かつ<br>旧制中学率<br>70%未満 | Bグループ<br>3707教材 | bグループ<br>1354教材 |
| 旧制中学率<br>70%以上                      | Cグループ<br>890教材  | cグループ<br>1997教材 |

表4の作成基準

1 教材名が異なっても出典が同じで、教科書の編集者・発行年などを考えるとほぼ同一の教材と見なせるものはグループ化して分類した。

2 各教材の採録数中、旧制中学或は高等女学校の教科書に占める割合が70%以上かどうかで、A B C a b cの6グループに分類した。大文字は同じ教材の採録数が5以上、小文字は5未満を表す。A aのグループは高等女学校の教科書に、採録数の70%以上が採られていること、C cは旧制中学の教科書に70%以上採られたこと、B bはいずれかの教科書の採録数に占める割合が70%未満であることを示している。

つまり採録総数6の教材が高等女学校の5教科書に採られている場合はAに、4採られている場合はBに分類した。また採録総数4の教材が旧制中学教科書に3採られた場合はcに分類した。

表5 ABCグループ別 教材数の多い作品

| Aグループ     |       |     | Bグループ  |       |     | Cグループ   |       |     |
|-----------|-------|-----|--------|-------|-----|---------|-------|-----|
| 教材名       | 作者名   | 教材数 | 教材名    | 作者名   | 教材数 | 教材名     | 作者名   | 教材数 |
| 隅田川       | 謡曲    | 30  | 奥の細道   | 松尾芭蕉  | 74  | 鉢木      | 謡曲    | 28  |
| そぞろごと     | 樋口一葉  | 27  | 伊勢物語   | 在原業平  | 70  | 為朝の軍議   | 保元物語  | 26  |
| 美術に現れた国民性 | 藤掛静也  | 22  | 新島守    | 増鏡    | 64  | 戯作三昧    | 芥川龍之介 | 26  |
| 蜜柑        | 芥川龍之介 | 20  | 大原御幸   | 平家物語  | 62  | 侍賢門の戦   | 平治物語  | 23  |
| 十六夜日記     | 阿仏尼   | 19  | 百足譜    | 横井也有  | 60  | 富士登山    | 荻原井泉水 | 21  |
| 南京の壺      | 柴田鳩翁  | 18  | 落花の雪   | 太平記   | 55  | 菖蒲の節句   | 島崎藤村  | 18  |
| いさよふ月     | 阿仏尼   | 17  | 光頼卿の参内 | 平治物語  | 52  | 伊能忠敬の晩年 | 幸田露伴  | 18  |
| 紋章        | 沼田頼輔  | 17  | 犬ころ    | 二葉亭四迷 | 51  | 春宵漫步    | 夏目漱石  | 18  |
| 女流俳人      | 荻原井泉水 | 17  | 長柄堤の訣別 | 坪内逍遙  | 49  | 松江の朝    | 小泉八雲  | 17  |
| 新古今集      | 新古今集  | 17  | 人臣の道   | 北畠親房  | 48  | 日蓮上人    | 高山樗牛  | 17  |

|        |      |     |         |       |     |         |      |     |
|--------|------|-----|---------|-------|-----|---------|------|-----|
| 原信僧都の母 | 今昔物語 | 1 6 | 空行く雁    | 曾我物語  | 4 8 | 秋風五丈原   | 土井晚翠 | 1 7 |
| 有王島下り  | 平家物語 | 1 6 | 世界の四聖   | 高山樗牛  | 4 8 | 秋の力     | 綱島梁川 | 1 5 |
| 言葉の変遷  | 佐々醒雪 | 1 5 | 菅公の左遷   | 大鏡    | 4 7 | 日本文学研究  | 藤村作  | 1 5 |
| 奈良の初夏  | 大類伸  | 1 4 | 羽衣      | 謡曲    | 4 6 | 小泉先生の旧居 | 厨川白村 | 1 4 |
| 国歌の話   | 田辺尚雄 | 1 4 | 武蔵野     | 国木田独歩 | 4 5 | 南洲遺訓    | 西郷隆盛 | 1 4 |
| 桃      | 島崎藤村 | 1 4 | 芳流閣上の血闘 | 滝沢馬琴  | 4 5 | 日本趣味    | 佐々醒雪 | 1 4 |

### 制度上の両者の相違点

a 1891年の改正中学校令第14条「高等女学校は女子に須要なる高等普通教育を施す所にして尋常中学校の種類とす」

「1899年公布の高等女学校令と中学校令はその第1条で、それぞれ、一方の性の高等普通教育を為すことを目的とする学校であることを明記した。こうして中等普通教育は単に男女別学というだけではなく、性別によって学校種別も異なるものとされた。しかも、前者の普通教育には主婦にとって必須の知識・技術が含まれるのに対し、後者は、もっぱら上級学校進学や社会人になるための基礎教養が中心となるといった違いがあった。これは両者の学科や授業時数に反映している。つまり、高等女学校は、中学校とは修業年限が短いという点でも、外国語や数学の時間数が少なく、物理及び化学や法制及び経済がない代わりに家事、裁縫の時間を多くとっているという点でも、大きく異なっている。」(男女共学制の史的研究 p 64 橋本紀子 大月書店 1992年)

b 中学校の「教則大綱」・「学科及其程度」 「和漢文」「国語及漢文」  
高等女学校の「教則大綱」・「学科及其程度」 「国語」

c 明治34年3月22日高等女学校令施行規則、「国語は普通の言語、文章を了解し正確且自由に思想を表彰するの能を得しめ文学上の趣味を養ひ兼て智徳の啓発に資するを以て要旨とす 国語は現時の文章を主として購読せしめ進みては近古の文章に及ぼし又実用簡易なる文を作らしめ文法の大要及習字を授くへし」

旧制中学「国文学史の一斑を授け又平易なる漢文を購読せしめ」

d 明治34年3月5日の中学校令施行規則で「国語及漢文」 1～3年7単位 45年 6単位  
明治34年3月22日の高等女学校令施行規則 12年6単位 34年5単位

e 明治44年7月29日文部省訓令第12号「高等女学校及実科高等女学校教授要目」  
「購読の材料は普通文を主とし口語文・書牘文・韻文を交ふ。普通文は現代文を主とし近世文・近古

文を交ふ。何れも平易にして作文の模範とすべきものたるへし。口語文は簡明にして方言を雑ふることなく口語の標準を示すに足り話方・作文の模範とすべきものたるへし。書牘文は平易にして繁縷に失せず日用書牘文の模範とすべきものたるへし。韻文は新體詩・短歌・今様・俳句等に互りて格調高雅なるものたるへし。右諸種の文章は我国體及民族の美風を記し国民性を發揮するに足るもの、健全なる思想を延へ温良貞淑の女徳を涵養するに足るもの、古今東西の美德善行ある女子の事蹟又は忠良賢哲の言行を叙し修養に資すべきもの、高尚なる趣味に富み心情を優雅ならしむべきもの及日常の生活に裨益し常識を養成するに足るもの等たるへし」

f 明治44年7月31日 文部省訓令第15号 「中学校教授要目」

「購読の材料は普通文を主とし口語文・書牘文・韻文を交ふ。普通文は現代文を主とし近世文・近古文を交ふ。何れも平易にして作文の模範とすべきものたるへし。口語文は簡明にして方言を雑ふることなく口語の標準を示すに足り話方・作文の模範とすべきものたるへし。書牘文は平易にして繁縷に失せず日用書牘文の模範とすべきものたるへし。韻文は新體詩・短歌・今様・俳句等に互りて格調高雅なるものたるへし。右諸種の文章は我国體及民族の美風を記し国民性を發揮するに足るもの、健全なる思想を述へ道義的觀念を涵養するに足るもの、忠良賢哲の事蹟を叙し修養に資すべきもの、文学的趣味に富み心情を高雅ならしむるに足るもの、又は日常の生活に裨益し常識を養成するに足るもの等たるへし」

表6 作品の成立時代別割合

|          | 現代   | 江戸   | 室町   | 南北朝  | 鎌倉   | 平安   | 奈良   | 外国   | 漢文   | 不明   |
|----------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 高等女学校教材数 | 6197 | 836  | 122  | 237  | 386  | 272  | 31   | 38   | 11   | 29   |
| 高女比率     | 76%  | 10%  | 1.5% | 2.9% | 4.7% | 3.3% | 0.3% | 0.5% | 0.1% | 0.4% |
| 旧制中学教材数  | 6011 | 1121 | 127  | 297  | 423  | 299  | 44   | 8    | 11   | 59   |
| 中学比率     | 72%  | 13%  | 1.5% | 3.5% | 5.0% | 3.6% | 0.5% | 0.1% | 0.1% | 0.1% |

表7 女性著者・作家の教材数

| 著者名   | 作品数 | 阿仏尼   | 40 | 茅野雅子  | 16 |
|-------|-----|-------|----|-------|----|
| 九条武子  | 70  | 今井邦子  | 32 | 海上龍子  | 12 |
| 与謝野晶子 | 65  | 野上弥栄子 | 27 | 三輪田正子 | 12 |
| 清少納言  | 61  | 昭憲皇太后 | 27 | 黒田初子  | 11 |
| 樋口一葉  | 53  | 羽仁もと子 | 21 | 三宅やす子 | 11 |

|     |    |      |    |      |    |
|-----|----|------|----|------|----|
| 紫式部 | 45 | 下田歌子 | 19 | 人見絹枝 | 11 |
|-----|----|------|----|------|----|

表8 女性著者の作品数

| 校種            | 時代           |            |             |             |    |     |
|---------------|--------------|------------|-------------|-------------|----|-----|
|               | 現代           | 江戸         | 鎌倉          | 平安          | 奈良 | 外国等 |
| 高等女学校<br>(比率) | 507<br>(82%) | 15<br>(3%) | 33<br>(5%)  | 61<br>(10%) | 0  | 2   |
| 旧制中学<br>(比率)  | 14<br>(16%)  | 1          | 10<br>(11%) | 59<br>(69%) | 1  | 1   |

### 教材化された芥川作品は授業でどう扱われたか

a 「有能な作家芥川龍之介の文壇入りを、自然主義伝統に立つ作家たちは喜ばなかった」

(「芥川龍之介研究史」 関口安義 p12 芥川龍之介研究資料集成 別巻 日本図書センター 1993年)

b 「追悼号にいくつも載った、いたわりと同情に満ちた回想や右に見た好意的作品評や人物評を除くと、この時期から戦争をはさみ、戦後昭和二十年後半あたりまでに書かれる芥川論には、否定的立場に立ったものが目立つ。芥川龍之介は否定され、乗り越えられねばならないという一貫した論調が、文学的立場の相違を超えて次々と現れ、ここに芥川否定・超克の時代が到来する」(同上 p25)

c 岩波 国語学習指導の研究 巻七 昭和十二年三月二十日訂正第二冊 岩波書店編集部  
昭和国文読本教授参考書 東京宝文館 高野辰之編 巻4 昭和四年七月八日発行

d 「芥川龍之介の研究」竹内眞 大同館蔵版 近代作家研究叢書47

### 「蜘蛛の糸」の場合

「多くの文学読本や副読本に採られてみて、澄江堂の作品中最もポヒュラアな」童話(芥川龍之介研究資料集成 巻5 p15 芥川氏の原稿その他 神代種亮 文章倶楽部第十二巻第九号 昭和2年9月)

#### 指導書の読み

この教材は「健かな心の糧を与へる為によい題材であるのみならず、劇的に情景を浮かび上がらせる力がある点に於て、細い修辞上の技巧の間然する所なく行き互つてゐる点に於て、現代童話中稀に見る傑作」である。従って、「生徒は芸術的魅力の為に思はず知らずその世界に引き入れられてゆくであらう。そして漠然ながら、世界秩序の厳かさを感得するであらう。」この作品を扱う教授者は、口陀多を巡り、「何故仏様は口陀多を憐れまれながら、その心を、仏様にすがるやうに、悔悟を知るやうに作りなほされないのであらうか、一体何故そのやうな誤つた心を存立させて置かれるのであらうかといふ、いはば人間の自由意志と救済といふやうな問題」まで視野に入れた上で、特に「この篇の童話的な外貌の故に軽く読み去らうとする傾向が生徒にある」ような「場合には、適宜にこの文の深さを暗示するやうな問題を設けて、読みが上じりしないやうに導く」ことが望ましいとされる。「この篇は説明して理解させるよりも、読んで感得させるやうに暗示的に指導すべきものであるから、その為には、教授者は、一篇に含まれた思想の

根底を特にはつきりと把握しておく必要がある」という指導上の注意点も指摘されている。

#### 竹内の読み

「蜘蛛の糸」の「童話風の豊かな上品な書振は、何と、われわれの心を捉へることか。」「口陀多のエゴイズムをこらすのに蜘蛛の糸を以てした作者の力量を、寧ろ嘉すべきであらう。首尾一貫童話の逸品たるを失はない」作品というものである。「口陀多のエゴイズムをこらす」つまりは「仏にすがらうとしないで自我にのみたよらうとする人の心を救済されることは出来ないことを了解させる」作品ということになるのだろう。

### 「戯作三昧」の場合

#### 指導書の読み

「八犬伝の著作に苦心してゐる馬琴」という「歴史的人物を主人公に選びながら、さうしてよくその人物や時代を浮彫りにしながら、いよいよといふ点になると作者その人を直接に、しかも作者その人らしい句で出しきつてゐる」「創作小説」である。作品に描かれた「戯作三昧の心境は作者芥川龍之介の体験を生かしたものであり、「作者の鋭い自己反省」そして「冷徹な観察による心理解剖の鋭さ」で語られている。「何れにしても、創作心理の発展過程とその極致の描写に於て、深い体験の披瀝として、精到・的確な観照に於て、傑出した短編」である。「本来的に小説創作論である性質を具有してゐる」この作品は、「創作の苦心と歎びとを知らせ、更に「鑑賞の苦心と歎びとを暗示する」ものであろう。しかし「正しい読みといふものは、現代小説に於てもさう容易いものではない。まして註解的事項になると、無識のまままで読み過ぎてゐることが少くない。かういふ一般的習慣を破つて、これを真の学習の対象たらしめ、真の学習の方法を尽くさせる為には、指導者にそれに対する用意」が必要である。その「用意さへあれば、生徒の読みを聴き、質問に触れると共に、生徒の学習がどの点を把握し得て、まだどの点に彷徨してゐるかが掌を指すやうに理解せられ」るからだ、

指導書の註解は、「作者自身の体験を生かしている」作品、「作者の鋭い自己反省」の上に立つこの作には「冷徹な観察による心理解剖の鋭さ」が見られ、「磨きに磨かれた文品を残してゐる芥川」の手になる「透徹した心理解剖」が展開されているという視点で書かれる。その上で「本文は一面には創作の立場からの小説論としての意味にも役立たせたい訳である。併しさういふ取扱は、『読み』を完成し、『解釈』がすんだ後に『批評』の問題として、その段階に至つて始めて試みるべき」ものと結んでいる。

#### 竹内の読み

「他人の批評に耳を傾ける馬琴がある。他人の批評に神経をなやます馬琴がある。己の芸術を春水や種彦に比較されて自己の孤高に疑問を懐く馬琴がある。又古今と後生の板挟みとなつてゐる自己の地位を見守つてゐる馬琴がある。不安がある。が孤独の中にも『根かぎり書きつづける。今己の書いてゐる事は、今でなければ書けないかも知れないぞ』と云つて、王者のやうに『不可思議な悦び』『恍惚たる悲壯の感激』に満ちて筆をとつてゐる馬琴がある」

「この感激を知らないものに、どうして戯作三昧の心境が味到されよう。・ ・ここにこそ『人生』は、あらゆるその残滓を洗つて、まるで新しい鉾石のやうに、美しく作者の前に輝いてゐるではないか。」



「僅かに戯作三昧に耽って、孤独を忘れてゐるかの如き作者をみる。然かも、自己の芸術にも或懷疑を残し乍ら」創作に取り組む芥川

## 「蜜柑」の場合

### 指導書の読み

「作者は文壇に於て新技巧派・新理智派といはれただけあつて、作中に赤裸々の自己を決して出した事がなく、その点がいつもその作品に温みが欠けて居り、生きた血が通つて居らないと非難する向もあるやうであるが、此の作品は極めて短編であるに拘らず、全く従来の氏の諸作 殊に歴史物などに見ることの出来なかつた作者の赤裸々の温かい感情が表現されてゐる。その為であらう、此の作が発表された時は、作者としての従来の氏の殻を破つたものだといつて、大分好評であつた。材題が人情の琴線に触れるやうなものであるからでもあらうが、作者が、冷やかな批判的態度を去つて自然の心の展開をその儘示した処が人を動かす力がある。『昂然と頭を挙げて、まるで別人を見る様に小娘を注視した』といふ作者の態度を嬉しく思ふ。それに対して『大きな風呂敷包を抱へた手に、しつかりと三等切符を握つて』平気で二等客車に腰をかけて、都会へ初めて奉公に行く此の小娘の姿は、人生の或実相を我々の心眼にはつきりと映し出させてくれるではないか。よくこの場の情景を読者に味はせたいと思ふ。一篇事件の展開と、それに伴ふ心理的過程とを極めてあざやかに、又極めて簡潔に、寸分の隙もなく、又少しの無駄もなく表現してゐるものである」

### 竹内の読み

「現代に題材を取り、素材的に觀ても『羅生門』『傀儡師』時代の歴史的背景を捨てて、新しい境地を開拓」した「蜜柑」は、「かくの如き日常茶飯事の中から斯くも尊い主題を、われわれに見せて呉れた」作品であると芥川に感謝する。更に「かかる日常平凡事から竟の所謂『燦として輝く人生の宝石』」を初めて見出した芥川は、その感動を「不可解な、下等な、退屈な人生を忘れる事が出来た」と「反省的に云つてゐる。ここに彼の人生と芸術の態度が顕示されてゐる。」すなわち、「『輝だらけの両頬』や『霜焼けの手』<中略>を描いた作者は、もう前期の作者ではない。我我はこの現実に直面した、新しい作者を発見する」

「小娘の持つてゐる三等切符は大事な役目を持つてゐる。此の切符が猶更男には憎悪の念を増さしめた。男は確に階級を意識し権利を主張してゐる。之に反して小娘は極めて平気な気持である。彼女には階級がない。粗野な性格の中に、美しい自然の醇情が溢れてゐる。作者は専らこの娘を生かそうとしたにちがひない。二等客をして小娘を嫌がらせたのも、此の小娘の醇情を鮮明に描き出す用意であらう。田舎者らしく描かれてある。隧道の間際で窓を開ける所などは、彼女の人物をかなり自然に取り扱つてゐる。斯うした粗野な小娘には一片の尊いものがある。<中略> 野生の陰には相当に人間性の崇高さと、温かさがある。この野生の自然さ、性格の中にある敬虔さを窺はうとしたのがこの作品の主題であらうと思ふ。この小娘を作者は可成リアルに見てゐる。」と、宮島新三郎の「芥川龍之介論」を紹介し、「蜜柑」は「現実に対する驚異と自己の芸術觀との反省を語るもの」の一つと結んでいる。

## まとめに代えて

問題意識は二つあった。戦前の中等教育で、芥川龍之介の作品はどう教材化されていたかが第一点であった。男女別学制度の下、芥川の場合も含め教材化された作品は、男女で大きく異なっていた。また、男女共通教材と分類したのも、当時は別の学校で別の先生から学んだことにも注意したほうがよいだろう。

男女で違う教材が採られたことの原因・背景分析は、教材全体中で行われるべきものである。芥川の場合に限ると印象批評的なものになると思うが、少なくとも次の傾向は指摘したい。表3に見られる教材のうち、採録数5以上の作品を眺めると分かることだが、高等女学校の教科書に多く採られた作品には、すべて女性が主人公に準ずる役割で登場している点である。「蜜柑」には「小娘」、「手巾」では「西山篤子」が登場し、作中の役割も大きい。それに対し旧制中学の教科書に多く採られた作品ではどうか。「戯作三昧」にしる「トロッコ」にしる、女性の登場人物はあるが通行人の役割でしかない。また高等女学校と旧制中学の共通教材ではどうか。「蜘蛛の糸」「槍ヶ岳紀行」「或日の大石内蔵助」にはゼロであるし、「杜子春」で地獄で鞭打たれている場面で登場するだけである。従って、「蜜柑」と「手巾」は、女性が大きな役割を持って作中に登場する数少ない作品ということになる。この点が高等女学校の国語教科書に採られた理由の一つだったのだろうか。

これに関係するかどうか不明な点もあるが表8を見ていただきたい。作品の執筆者・作者は、全教材延べ数の95%が男性という構成になっているが、それを旧制中学と高等女学校別に分けてみると、前者の女性作者（の作品数比率）は1%であるのに対し、後者では7%であることが分る。女性作者の作品は、旧制中学では延べ86だが、多くは清少納言・紫式部など中古の作品であり、明治以降の作品は与謝野晶子・樋口一葉・九条武子など計14に過ぎない。一方高等女学校では618教材中、507が明治以降の作者の手になるものであり多様な顔ぶれが並ぶ。全体に占める女性作者の比率が4%余という絶対少数の中での比較であり、また芥川の場合だけから推測するのは無理があるが、作者あるいは作品の登場人物が女性の場合、その作品が女子向きつまりは高等女学校向き教材と考えられていたのかもしれない。

第二の問題意識は、男女によって異なる場合もある教材は、それぞれどう読まれていたかを、芥川の場合に限って振りかえることであった。「蜘蛛の糸」「戯作三昧」「蜜柑」について「物差し」を“指導書”と竹内氏の著書に求め比較したわけだが、その結果は「蜜柑」についてだけ視点の違いによる相違が見られた。この差異をどう考えるか。この点については時代思潮・社会状況・国語教育の様々な運動とも絡んでくるとも思われ、答えはまだ見出せていない。戦前の中等教育で国語の授業数は、学年にもよるが、高等女学校・旧制中学それぞれで総単位数の二割前後を占めており、教育の中で果たした役割は大きかった。戦前の教育は「性別役割分業観」再生産の教育という図式を徒に持ち出しても無意味だが、授業や教材にもヒドゥン・カリキュラムが潜んでいるというのは80年代後半からの様々な研究が明らかにしてきたことである。そうした視点も含めた中で答えを探したいと思われる。